

# ネイチャーライティングの一例

## —『序曲』再考—

石原 久子

An Example of Nature Writings  
— Reconsideration of *The Prelude* —

Hisako Ishihara

### 要旨

自然と人間との関わりに注目して考察している文学は、ジャンルにかかわらずなく、ネイチャーライティングの文学とみなすことができる。本稿では、ネイチャーライティングの一つの例として、イギリスロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスの長編詩『序曲』を取り上げる。近年、エコクリティシズムという方法論が盛んになってきた。これは、広く文学と自然環境との関わりを考察し、文学研究の立場から、深刻化する環境破壊への提言を模索する試みである。地球規模の環境危機に直面する現代社会に生きる者として、自然を主題とする文学は単なる過去の遺産ではなく、新たな価値をもつものとなる。ワーズワスの自然体験は独特である。大自然と人間精神とが直接的に対話・交流し、お互いに高次元の状態へと高めあうのである。これを交感体験と呼ぶ。このような自然体験は、目の前に見える自然の形象物はもはや実体を伴わなくなり、主体と客体は融合して一体化する。その結果として、眼前の風景が自分の内部精神が投影された心象風景のように思われるのである。『序曲』は詩心の萌芽および成長発達過程をたどったものであるが、心身の成長に伴って自然との交感体験を積み重ねることによって、精神の能動的な働きの度合いが徐々に増幅してくる。2回の登山体験は、自然との交感体験の集大成ともいえる啓示的な意義深い体験として重要である。それは、大自然が人間の精神の働き様を具現化している風景をまざまざと目撃して、体感したからである。『序曲』の結論として、ワー

ズワスは大自然の預言者として、人々に自然体験の意義深さと貴さ、そして、人間精神の働きの偉大さを語り伝えようという力強い決意を表明する。これは預言者詩人としての意思表示である。ワーズワスは、科学の進歩と都会の発展に伴って自然破壊が急速に進行した時代背景にあって、自然の大切さを主張し、自然を軽視する社会に異議を唱えて警鐘を鳴らした。この意味でも、ワーズワスはイギリス文学におけるネイチャーライティングの先駆けの詩人として、注目すべき存在であるといえる。

キーワード

ネイチャーライティング、大自然、交感体験、預言者詩人

## 1. 序

人は何故だか知らずに自然に憧れるものだ。古今東西を問わず、自然を扱った文学は多い。先ず、ネイチャーライティングとは何かという基本的な定義を確認してみたいのだが、ネイチャーライティング、言い換えて、環境文学とは、自然と人間との関わりに注目して考察している文学を指し、ノンフィクションから詩や小説や演劇まで、自然がクローズアップされている全ての文学を広く含むものである。本稿では、ネイチャーライティングの作家の一人の例として、イギリスの詩人のウィリアム・ワーズワス（1770-1850）を取り上げる。

ワーズワスと言えば自然と言うくらい、彼は自然派詩人として有名である。ワーズワスと自然との密接な結びつきを考えると、英文学の歴史的変遷を念頭に入れる必要があるかと思うので、簡単に振り返ってみたい。18世紀のイギリス文学は新古典主義の時代と呼ばれ、目の前に見える花鳥風月のような自然よりも、人間が古典文学の中に描いて把握している自然、つまり、人間の支配下にある自然が重要視され、自然は人工的な扱いを受けた。そのような人間の理性の能力に疑いを抱き、自然を無理に支配せず、むしろ自然と融和したいと考える詩人が現れ、さらに進んで、大人の理性の中よりも、素朴な自然の中にすぐれた美しさを見出したのがワーズワスであり、ロマン主義の時代と呼

ばれている。ワーズワスの自然観は、フランスの哲学者であるジャン・ジャック・ルソーの「自然に帰れ」という主張に呼応する、いわば原始的で土俗的な趣味であったとも言えるが、古典の詩句に束縛されずに生の自然を眺めた態度は、イギリスの詩の歴史上、画期的なことであった。

ロマン主義的自然観は、産業革命以降の急速な工業化と近代化に対する漠然とした不安により、自然に対する科学や都会や人工物などが嫌悪されるようになり、その一方で、緑の神話といえる崇高な自然への新たな崇拜が起きたことにより確立した。しかし、猥雑化されていく都会や、汚されていく人間社会への反発としての自然崇拜は、否定的側面、すなわち、自然が失われ続けることでしか成り立たないという矛盾を抱えていることも確かである。それは、喪失は失敗や挫折と常に表裏一体であるという、ロマン主義の皮肉にも通じるものであるが、自然を軽視する、以降の時代や社会に対して異議を唱えて警鐘を鳴らす、先触れとしてとらえることができる。地球規模の環境危機に直面する現代社会に生きる者として、自然と人間とのよりよい関係を目を向けようとするならば、自然を主題とする文学は単に過去の遺産ではなく、新たな価値を持つものであると言える。

20世紀末からエコクリティシズムという方法論が盛んになってきた。これは、広く文学と自然環境との関わりを考察し、文学研究の立場から、深刻化する環境破壊への提言を模索する試みである。アメリカの作家であるヘンリー・デイヴィッド・ソロー (1817-1862) が書いた『森の生活—ウォールデン』(1854) が、多くの批評家によって、ネイチャーライティングの最高傑作とみなされている。エコクリティシズムはソローのこの作品を源流として出発した。エコクリティシズムの研究はアメリカで盛んで、イギリス文学における研究は始まったばかりであるが、自然をこよなく愛してうたったワーズワスの作品も、その研究範疇に入ると思われる。エコロジーという用語が、社会や経済の分野にとどまらず、文学批評の分野においても一つのキーワードになってきたのである。

ワーズワスが諸作品で主張している自然観は、彼独特の自然体験を描写している点で注目されると同時に、環境問題を抱える現代社会への力強い一つの提言として読み取ることができる。本稿では、ワーズワスの作品の中から特に、

英文タイトルは *The Prelude*, 日本語のタイトルは『序曲』という作品を取り上げる。この作品は、ワーズワスが自分自身の前半生の様々な出来事を詳しく省察し、詩人の魂の成長発達過程をたどった自叙伝的な長編詩である。その中から特に、自然体験の描写をいくつか考察する。『序曲』は、1799年に「2部作の序曲」として書かれたのが最初で、その後、1805年に13巻に拡大されてまとめられた。その後も加筆削除訂正などの推敲が繰り返しながら、1850年に14巻に再編成された。

『序曲』はワーズワスの代表作品の一つであるので、今までに日本で2冊の論文集が出版された。『ワーズワス『序曲』論集』<sup>1</sup>と『ワーズワスと『序曲』』<sup>2</sup>である。前者の論集には、「叙事詩としての『序曲』」、「『序曲』断想」、「『序曲』の創作過程の関する一考察」、「スノードン登頂体験の意味」、「『序曲』の漂泊のイメージをめぐって」、「『序曲』の社会的背景」、「ワーズワス評価の諸問題」が収録されている。後者の論集には、「*The Prelude*—記憶の風景と遠近法」、「ワーズワスにおける孤独について」、「ワーズワスと‘spirit’—『序曲』解説のために」、「少年はなぜ死んだか—“There was a boy”における加筆の意味」、「“chasm”を読む—ワーズワス『序曲』」、「道に迷うワーズワス—『序曲』におけるテキスト操作の問題」が収録されている。どちらの論集に収録されている論文も啓発的で示唆に富むものであるが、ワーズワスの自然体験を今一度考え直す価値があると筆者は確信する。

## 2. ワーズワスの自然体験

『序曲』の中から実際にパッセージを引用して検討していきたい。印象深い美しい自然風景を見たときに、きれいだなあと感動する人は多いと思うが、ワーズワスの場合は単なる感動とは違う。

Yes, I remember when the changeful earth  
And twice five seasons on my mind had stamped  
The face of the moving year, even then,

A child, I held unconscious intercourse  
With the eternal beauty, drinking in  
 A pure organic pleasure from the lines  
 Of curling mist, or from the level plain  
 Of water coloured by the steady clouds.<sup>3</sup> (I, 586-593)

ワーズワスの自然体験は、彼の心と大自然とが対話するのが特徴である。それが、交感体験と言われるものである。（注：交換ではなく、交感 exchange ではなく intercourse.）これはワーズワス独特の、一種の神秘的な自然体験であるので、多くの批評家から注目されている。例えば、「想像力による、人間精神と大自然との婚姻関係（wedding）」<sup>4</sup>と呼ぶ人がいたり、「外界と内なる精神との相互作用（interaction）」<sup>5</sup>と呼ぶ人がいたり、「外界とワーズワス自身の精神との相互依存（reciprocity）」<sup>6</sup>と呼ぶ人がいたり、「内と外、精神と対象、情熱と知覚の共同作業（joint effort）」<sup>7</sup>と呼ぶ人もいる。どのような表現をするのであれ、大自然と人間精神との恵み深い相互作用が交感体験の根幹を成すとみなしている点では一致している。自然と精神とがお互いに好ましい作用を及ぼし合うだけでなく、さらに言うと、精神と自然の各々が高次元の様相へと昇華されることを、ニュアンスとして含むものである。

次の引用文は具体的でわかりやすい。

… a boy I loved the sun  
 … for this cause, that I had seen him lay  
 His beauty on the morning hills, had seen  
 The western mountain touch his setting orb  
 In many a thoughtless hour, when from excess  
 Of happiness my blood appeared to flow  
 With its own pleasure, and I breathed with joy. (II, 184, 188-193)

朝あけや夕方の方の山の端に太陽の弧が接するときに幸福と歓喜の極みに達し

て、息をのむほどに感動したと描写されているところから、自然が示す一瞬の微妙な靈妙な美しさをとらえるワーズワスの鋭い感受性をよみとることができる。『序曲』という作品の中では、太陽や月などの光に感動した体験を綴ったパッセージが多いのも特徴の一つである。

先に交感体験と言う言葉を説明したが、精神は外界の自然に対して受容的 (receive) であると同時に創造的 (create) であるわけだが、精神の創造的な働き様を描写したのが、次の引用文である。

A plastic power

Abode with me, a forming hand, at times  
 Rebellious, acting in devious mood,  
 A local spirit of its own, at war  
 With general tendency, but for the most  
 Subservient strictly to the eternal things  
 With which it communed. An auxiliar light  
 Came from my mind, which on the setting sun  
 Bestowed new splendor; the melodious birds,  
 The gentle breezes, fountains that ran on  
 Murmuring so sweetly in themselves, obeyed  
 A like dominion, and the midnight storm  
 Grew darker in the presence of my eye. (II, 381-393)

パッセージの冒頭で「ある形成力」と表現されたものが、光の比喻を使って敷衍的に説明されている。ここで「補助的ひかり」と呼ばれているものが、精神の創造性 (creativity)、つまり想像力 (imagination) による事物の新しい様相への創造的変容 (creation) を暗示している。夕陽の美を感受したワーズワスの心は、本来の陽光に彼の内部精神から出る光を添える。その結果、夕陽はさらに魅力を増して一層美しいヴィジョンへと変容し、一方、ワーズワスの心は一層強い歓喜を経験する。夕陽とワーズワスの精神との間を、自然発光体の

夕陽の光と精神の比喩な光が相互に行き交い、好ましい作用を及ぼし合うのである。ここの「補助的ひかり」は、夕陽だけでなく、自然の様々な形象物に添えられ、その「補助的ひかり」を受けた自然は高次元に昇華され、精神は一層印象深く強い感動を覚えるのである。

次の引用文を検討してみよう。

But ere the fall  
Of night, when in our pinnacle we returned  
Over dusky lake, and to the beach  
Of some small island steered our course, with one,  
The minstrel of our troop, and left him there,  
And rowed off gently, while he blew his flute  
Alone upon the rock, oh, then the calm  
And dead still water lay upon my mind  
Even with a weight of pleasure, and the sky,  
Never before so beautiful, sank down  
Into my heart and held me like a dream. (II, 170-180)

このパッセージでは、吟遊詩人の少年が吹くフルートの音色と、この上なく美しい夕焼け空という具合に、聴覚的にも視覚的にも強く訴えるものがある。フルートの澄みきった音色が自ずと連想され、読者もすがすがしい気持ちになる。この時に、湖水が快い重みを伴って心に広がったとワーズワスを感じた点に注目したい。まるで流水が心という器に注ぎ込まれるように、水が意思をもった動作主であるかのように心に働きかけ、大自然の恵み深い影響力が心に染み込み、聴覚と視覚の共感覚（synthesis）の相乗効果で恍惚状態へと誘われたのである。

次の引用文は、自然と精神との交感体験の中でも、自分の目に見える外界の自然が、肉体の目で見ていることを超越して、自分の内部精神の心象風景のように思われたことを語ったものである。

How shall I trace the history, where seek  
 The origin of what I then have felt?  
 Oft in those moments such a holy calm  
 Did overspread my soul that I forgot  
 That I had bodily eyes, and what I saw  
Appeared like something in myself, a dream,  
A prospect in my mind. (II, 365-371)

【序曲】はワーズワス自身による詩心の萌芽・成長・発展の過程をたどるものであるが、ワーズワスが確かに体験したものの根源を探求する試みでもある。外界の自然が自分の内部精神の心象風景のように思われたということは、ワーズワスの精神の成長発展過程の重要な一段階でもあり、ワーズワスの自然体験の特徴の一つでもある。

次の引用文は、湖水と心との一体化を描写したもう一つのパッセージである。

As one who hangs down-bending from the side  
 Of a slow-moving boat upon the breast  
 Of a still water, solacing himself  
 With such discoveries as his eye can make  
 Beneath him in the bottom of the deeps,  
 Sees many beauteous sights—weeds, fishes, flowers,  
 Grots, pebbles, roots of trees—and fancies more,  
 Yet often is perplexed, and cannot part  
The shadow from the substance, rocks and sky,  
 Mountains and clouds, from that which is indeed  
 The region, and the things which there abide  
 In their true dwelling; now is crossed by gleam  
 Of his own image, by a sunbeam now,  
 And motions that are sent he knows not whence,



Impediments that make his task more sweet; (IV, 247-261)

水面下を覗き込んで目に様々なものが映るのだが、「実体と映る影との区別がつかなく」なった点が象徴的である。水面を覗き込む行為は、実は自分の心の内面を覗き込むことである。湖水は心の鏡であり、湖水に映るものは精神の心象風景なのである。水底にあるはずの海草や魚や花や小穴や小石や木の根、あるいは、水面に映る岩や空や山や雲や、自分自身の姿さえも、個々の物としての実体性が失われたように感じたということは、湖水と心との一体化にとどまらず、さらに進んで、大自然の森羅万象の事物との一体化を意味するものである。実体と影とは表裏の区別がなくて一体で、主体と客体、主観と客観は融合する。その体験が困惑すると同時に楽しくもあると感じている点に、ワーズワス独特の感性を見出すことができる。

次の引用文は、「一人の少年がいた」という文章で始まる有名な挿話である。その少年は、星がきらめき始める頃の夕暮れ時に湖畔に一人たたずみ、指と指とを巧みに組み合わせて、フクロウの鳴き声を真似して吹くのである。すると、向こう岸の谷間から本当のフクロウが鳴いて、こだまのように響きわたるのである。少年の心と大自然との交流である。しかし、時々沈黙がおとずれて、そのような時のことである。

And when it chanced  
That pauses of deep silence mocked his skill,  
Then sometimes in that silence, while he hung  
Listening, a gentle shock of mild surprise  
Has carried far into his heart the voice  
Of mountain torrents; or the visible scene  
Would enter unawares into his mind  
With all its solemn imagery, its rocks  
Its woods, and that uncertain heaven, received  
Into the bosom of the steady lake. (V, 404-413)

流水が器に注がれるように、溪流の水音が深く心に染み渡ったということ、そして、周囲の森羅万象の事物が湖水と一緒に心に入り込み、融合して一体化したことが描写されている。湖水には大空が映し出されているので、なおさら広大なイメージが膨らむ。この挿話は「ある少年」の体験談であり、ワーズワス自身の体験談ではない点に注意が必要だが、鋭い知覚と豊かな感受性を持つワーズワスの大自然の中での交感体験と同質のものである。

今まではワーズワスの少年時代の自然体験に焦点を当てて検討してきたが、自然体験の積み重ねの集大成とも言える経験を、青年時代の登山体験に見出すことができる。『序曲』の自然体験を論ずるうえで、この登山によって目にした山岳風景を避けて通ることはできない。一つはヨーロッパ大陸のアルプス登山、もう一つはイギリスのウェールズ地方のスノウドン山の登山であるが、この二つの体験は、ワーズワスの数多い自然体験の中でも啓示的体験として重要な意味を持つものである。

アルプスの山岳風景は次のように描写されている。

The immeasurable height

Of woods decaying, never to be decayed,

The stationary blasts of waterfalls,

And everywhere along the hollow rent

Winds thwarting winds, bewildered and forlorn,

The torrents shooting from the clear blue sky,

The rocks that muttered close upon our ears—

Black drizzling crags that spake by the wayside

As if a voice were in them—the sick sight

And giddy prospect of the raving stream,

The unfettered clouds and region of the heavens,

Tumult and peace, the darkness and the light,

Were all like workings of one mind,...

The types and symbols of eternity,

Of first, and last, and midst, and without end. (V, 556-568, 571-572)

天をつくほどに高く聳える樹木、岩の裂け目に吹き溜まった風、ごつごつとした岩山、轟き落ちる滝、勢いよく流れる溪流という具合に、個々の構成要素のインパクトが強いことに加えて、それら暗い地上のどよめきと対照的な清らかな天空といった情景全体は、畏敬の念を呼び起こすような驚嘆すべき荘厳で崇高な山岳風景である。脳裏に焼きついて離れない衝撃的なこの崇高な風景を見たワーズワスは、個々の事物が圧倒的な存在感を主張していながらも、それでも全体が調和されて統一されていると感じ、「一切が一個の精神の作用のよう」であると述べている。すなわち、この風景が自分自身の精神そのものを表している心象風景のように思えたのである。目の前の風景が自分の精神の働き様を実際に具現化していると感じたと同時に、大自然の営みと匹敵するほどの人間精神の働きの力強さと偉大さを実感したことになるので、この体験は非常に貴重であると言える。

一方、スノウドンの山岳風景であるが、天空に高々と昇り凜として輝く月から一条の光が閃光のように射し、ワーズワスは霧の海の岸辺に立っていることに気づく。この幻想的な状況下で目に入ったものは、灰色の霧の海の中に点々と黒々とした背をもたげ上げる峰々、本物の海のお株を奪うほどに突き進む霧の海の波動、霧の海の中にできた一本の暗黒の深淵、その深淵から聞こえてくる無数の流れの轟きであった。

… from the shore

At distance not the third part of a mile

Was a blue chasm, a fracture in the vapour,

A deep and gloomy breathing-place, through which

Mounted the roar of waters, torrent, streams

Innumerable, roaring with one voice.

The universal spectacle throughout

Was shaped for admiration and delight,

Grand in itself alone, but in that breach  
Through which the homeless voice of waters rose,  
That dark deep thoroughfare, had Nature lodged  
The soul, the imagination of the whole. (XIII, 54-65)

明暗や静と動の対比も印象的なこの風景は、やはり崇高美の風景である。個々の事物が存在感を持ちながらも全体が統一されていて、畏敬の念を感じさせて驚嘆に値する情景である。注目したいのは、霧の海の中にできた紺青の亀裂である。その亀裂の深淵から無数の流れの音が立ち昇ってくるのが聞こえるのだが、その紺青の裂け目の奥底にこそ想像力が宿っている場所だと、ワーズワスは認識した。アルプスの山岳風景と同様に、ここでも、自分の精神の働き様が具現化されている風景を目の当たりにしたことになる。無数の流れの轟き音が上昇気流に乗って霧の抜け穴を昇ってくるにつれて、一つの音に統合されて天空へと響いているということは、混沌をも統合して永遠へと導く機能を想像力を持つことを意味する。その機能が実演される様をワーズワスは体感したことになるので、この自然体験は非常に象徴的で啓示的である。

### 3. 結び

次の引用文は『序曲』という作品の結論ともいうべきもので、詩人としてのワーズワスの自覚を明言したものである。

… if we may be  
 United helpers forward of a day  
 Of firmer trust, joint labourers in the work—  
 Should Providence such grace to us vouchsafe—  
Of their redemption, surely yet to come.  
Prophets of Nature, we to them will speak  
 A lasting inspiration, sanctified

## By reason and by truth; (XIII, 437-444)

ワーズワスは自分が実体験した自然との交感体験の意義深さと貴さに対する揺るぎない思いを基にして、それを人々に伝える語り部になろうという意思表示をしているのである。ここで、「大自然の預言者」という言葉に注目したい。預言者とは、未来の物事を推測して言う人を指すのではない。歴史をさかのぼると、旧約聖書の預言者にたどりつくが、本来は、神から預けられた言葉を人々に伝える特別の任務を託された指導者を指す。<sup>8</sup> 神が預言者に託す言葉は、未来の予測ではなくて、今現在進行中の社会事象について、人々がどのような心構えで対処したらいいかについての助言であり、人々の好ましくない行為に対する戒めである。しかし、ワーズワスは神の教えを人々に述べ伝えるキリスト教の伝道師ではない。彼にとって神に相当するものは、ほかならぬ大自然なのである。大自然と対話することによって、精神が高次元の状態へ昇華する。大自然は人を導き、精神の滋養となり、恵みを与えてくれる。だからこそワーズワスは、大自然の預言者としての行為が、社会や人間の救済につながると信じているのである。言い換えると、預言者詩人としての役目を果たそうとしているのである。<sup>9</sup>

真の詩人は預言者の性格を帯びている。批評家グリアソンは、預言者詩人を、自国が深刻な社会的危機状態にあるときに、天与の伝言を直観的に理解し、それらを人々に修辭的言語で伝えようとする人であると定義する。そして、英文学においてはジョン・ミルトン(1608-1674)が主要なモデルであり、そのミルトンの主要な後継者はワーズワスであるとみなしている。<sup>10</sup> エイブラムズも同様に、“philosopher-seer”あるいは“poet-prophet”という伝統的ペルソナにおいて自己表現した19世紀の文学者を認めている。そして、彼らが文化的危機の時代風潮の中で、「希望の基盤を再構築し、再生の確実性、少なくともその可能性を宣言するべく」文筆活動に携わったと主張する。<sup>11</sup> ワーズワスは、預言者詩人として、自然が荒廃した社会を批判し、自然を軽視する社会へ異議を唱えて警鐘を鳴らす任務を担おうとしているのである。

このように、19世紀の一人の詩人の作品も、環境問題を抱える現代の私た

ちの心のひだに触れる点があるように思われる。自然との直接的対話を通じて、自然の中での交感体験の貴さを学び、人間の精神が創造することの偉大さを学び、自然体験の意義深さを肌で感じる大切さを主張することによって、自然あるいは田舎と対極にある都会あるいは科学技術の営み—それらはある程度の長所があるので完全に否定すべき事柄ではないのだが—の尋常ではない発展状況に危機感を覚えて、異議を唱えて警鐘を鳴らしていると言える。ワーズワスが生きた 18 世紀後半から 19 世紀前半にかけては、科学の進歩と都会の発展に伴って自然破壊が急速に進行した時代であるが、そのような時代背景において自然の大切さを主張したワーズワスは、イギリス文学におけるネイチャーライティングの先駆けの詩人として、注目すべき存在である。ただ単に自然を賛美した作品を書いたというだけでなく、環境問題を抱える現代社会に生きる私たちの心の琴線に触れる提言をした詩人であるという点において、注目すべき存在であると言えよう。

## 注

1. 岡三郎編『ワーズワスと『序曲』論集』（国文社、1988 年）。
2. 吉野昌昭編『ワーズワスと『序曲』』（南雲堂、1994 年）。
3. William Wordsworth, *The Prelude, The Prelude; or Growth of A Poet's Mind: 1799, 1805, 1850*, eds. by Jonathan Wordsworth, M.H.Abrams, and Stephen Gill (New York: Norton, 1979). 本稿における引用は全て 1805 年版に拠る。なお、英文中のアンダーラインは筆者による。
4. Raymond Dexter Havens, *The Mind of a Poet* 2 vols. (Baltimore: John Hopkins Press, 1940) I: 4.
5. Geoffrey H. Hartman, *Wordsworth's Poetry, 1787-1814* (New Haven: Yale UP, 1964; Cambridge, Massachusetts, Harvard UP, 1987) 219.
6. Harold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (Ithaca, N.Y.: Cornell UP, rev. 1971) 132.
7. M.H.Abrams, *The Mirror and the Lump: Romantic Theory and the Critical Tradition* (New York: Oxford Up, 1953) 51.
8. 拙論「預言者の使命—イザヤ書を中心に—」『日本橋女学館短期大学研究論集』

第8号, 1995年, 99-112を参照されたい.

9. 拙論「預言者詩人ワーズワス」『サウンディングス』第19号, 1993年, 37-52を参照されたい.

10. Herbert J.C.Grierson, *Milton and Wordsworth* (London: Chatto & Windus, 1937) 25.

11. Abrams, *Natural Supernaturalism* (New York: Norton, 1971) 12.